第４回「医療・介護連携　顔の見える関係づくり交流会」のレポート

第４回「医療・介護連携　顔の見える関係づくり交流会」を、平成 29 年９月 14 日(木)に山梨県立大学池田キャンパスにて開催しました。当日は 117 名の方にご参加いただきました。

最初に、主催者挨拶として甲府市福祉保健部 相良部長より、「顔の見える関係を、今後の業務や支援の中で深めていただき、「信頼できる関係づくり」へと強め、地域住民の一人ひとりが住みなれた地域で、その人らしい暮らしを長く続けられるように、ご協力をお願いしたいと思います。」と挨拶しました。

相良　保健福祉部長

コーディネーター
滝花　昌子　氏

続いて、座談会へと入りました。

今回は甲府市西地域包括支援センターの滝花昌子さんにコーディネーターをお願いしました。

滝花さんは、まず「事例に対して答えを導き出すのではなく、他人の意見をよく聴き、今後の連携がスムーズにいくよう、顔の見える関係を築いていただきたいと思います。」と参加者に向けて会の目的について再確認したあと、西エリアの地域の概要を説明してくださいました。西エリアのイメージが膨らんだところで、さっそく座談会を開始しました！

最初に事例紹介を行い、自分の職種ならどんな支援ができるか、考えていただきました。

今回の座談会では、「知的障害、不眠、不安の訴えがあり、服薬の管理がうまくいっていない独居の高齢者が、兄弟の支援を受けながら、その人らしく地域で生活するために、自身の職種ではどのような支援ができるか、また他職種とどのような連携を図っていきたいか」について、話し合いました。

事例を聴き終わり、バトンが、各グループのファシリテーターに渡されました。会場にはそれぞれのグループの声が響きます。自己紹介を行い、お互いの職種などが共有されたあと、事例について、自分の職種であれば、どのような支援が出来るのか意見を出し合い、より一層楽しそうな声が響きます。

座談会が終わると、話し合われた内容を他のグループの方にも伝えたいと、時間も迫る中、１０ものグループが発表してくださいました。

第 8 グループでは、「この方の能力を活かすために、与えられるだけではなく、本人が誰かに何かを与えられるような生活を考えてみてはどうかと話が出ました。本人の QOL に着目するとよりよい生活になるのではないか。」といった本人の役割に焦点を当てた意見をいただきました。

第 2 グループでは、「医療、介護の連携支援が必要な際は、誰が窓口になり、どこに連絡をするのか、ルートを作ることが大切。医師との連携に際して、自分たちで敷居を作らず、本日のような場を活用していくことが大切である。」といった連携の取り方に着目した話し合いの様子を伝えていただきました。

第 13 グループでは、「本人がどういう生活をしたいか、本人の意向を聞くことが大切。多職種で関わることで、今まで支援してくれた妹さんの関わりが少なくなってしまう。妹さんの力も借りられるような関わりも必要である。地域のこの方の理解を進めるためにも、地域ケア会議を開き、近隣住民の方に、本人の様子を理解いただく中で、地域での在宅生活へ戻る支援も必要があるのではないか。」と家族、地域への働きかけを見据えた意見がでました。

全体の感想では、作業療法士から「暗くならず、堅苦しくならず、とても楽しく、夢を語れる会であった。」という感想が出されました。また、医師からは、「色々な分野の専門家がおり、医師として触れないような話が聴け勉強になった。大切なのは情報の共有。日常的には電話や文書のやり取りが多いが、このような機会があると、顔と顔で面と向かいどういう方か分かった上で、関係を築いていけるのは有意義であった。1 度で終わらず、何回も開催していただけるとありがたい。」と次回の開催の期待をお話しいただきました。

まとめでは、コーディネーターの滝花さんより、「本人の望む暮らしの実現のため、様々な職種が連携して違う視点でその方のことを一緒に考えていくことは必要。皆さんがとても楽しく話しをしていただいているのをみて、この機会があって初めて生まれてくるのもだと実感している。今回の出会いを有効に活用していただき、今後、顔が見える関係から、信頼できる関係へと、連携が繋がっていけばうれしい。」と締めくくり、閉会しました。

会終了後も、また、それぞれ話に花が咲き、今後の連携について連絡先を再度確認する姿があちらこちらで見受けられ、盛り上がっていました。今後も、まだ開催していない地域包括支援センター支援エリアで開催していく予定です。参加をお待ちしております。